

シリーズ 「研究者をめざすあなたからメッセージ」

園部先生は、経済学部へ所属され専門は社会学。本学へはパリ留学を経て、4年前に着任されました。最近刷り上がった博士論文『アフリカ系女性移民者の「自立」と「連帯」—フランス・パリ市ZUS地区における社会・文化的仲介と市民団体活動—』を拝見しながらお話を伺いました。

アフリカとの出会いは小学校6年生、ユニセフ委員活動を通じてアフリカの大規模な干ばつを知りました。中学校に入り、80年代の国際化の波で男女雇用機会均等法ができ、未来が開ける思いがして「将来は国際機関で開発支援がしたい、何かの役に立ちたい」と決意しました。美術展や映画も好きで美術系もいかなと思っていて、2つの大きな夢がありました。いずれにせよ、フランス語がプラスになるのではと東京外国語大学へ進学。でもその大学では学芸員の資格が取れなかったため、国際関係に重点が移りました。90年代はエスニシティや移民の研究が盛んになりつつあった時代でもありました。もっと世界が変わっていくのではと期待が膨らみました。大学を卒業する年はバブル崩壊で就職が一番厳しく、就職できない女子大生がデモをしていた頃、それでも男子にはアポもない会社から山のような資料が送られてきていて、男女格差に愕然としました。受験は頑張れば差別はないけれど、社会では自分の努力と違うところで機会を奪われてしまう、そんな企業には期待できないと思いました。



経済学部
園部 裕子先生

“今からじゃ遅いと思っても、やれる今から続けてやってみよう”
“何であるかではなく、何をしたかで評価を決めない”
社会はいつまでもかわらない”と思う。

未来が開ける思いがした均等法から10年経っても、社会は変わっていなかった。大学院のセミナー合宿に、学部生でしたが参加してみました。自分の知らないことをいっぱい知っている大学院生がとても興味深い話をしてくれ、魅力的で知らない世界をたくさん見せてくれました。勉強が楽しかったし、「実力でやっていける世界がまだあった、よしここでやるぞ」と思い、大学院に進学することに決めました。進学に際して卒業論文とフランス語をがんばりました。

難関を突破し東京大学大学院へ進学。しかし大学院での勉強は厳しく、修士論文に3年間かけた後、博士課程に進学しました。大変な時期でしたが、育英会からの奨学金を先行投資するつもりで語学学校にも通い詰め、フランス語をマスターしました。“何かを始めるにはいつも遅すぎることはない、思いついた今からやってみよう”と思ったからです。研究テーマでも壁に突き当たり先が見えなくなった時、「アフリカの女性の研究は少ないから、あなたがやってくれたらいいと思う」と先輩に助言され、「そうだ！私はアフリカがやりたいと思って研究を始めたんだ」とはっと思い直しました。テーマが絞りこめた時、念願のフランス政府給費留学生試験に合格、フィールド・ワークのためのパリ留学が決まりました。

フランスには、いくつかの資金を使って最終的に6年間滞在しました。パリの移民も多い地区に住み、ずっとアフリカ出身移民女性たちの市民団体運動によるエンパワメントを調査してきました。

香川大学では、フランス語と現代フランス、ヨーロッパの社会について教えることを職務としています。フランスで6年間続けた調査の蓄積を講義にも全面的に反映させているので、学生も関心を高められるようです。出会いを大切に、とにかく続けること。それが、自分の自信につながったのだと思います。気付けば人生の半分近くを、フランスに触れながら過ごしています。

